

広島俳句倶楽部

令和四年七月作品集

坂の町

知佳子

娘のお産の手伝いで横浜に行きました。
近所の皆さんは、薔薇や紫陽花をはじめ様々な草木を育てておられ、歩いているとお互いに挨拶や会話を交わし、広場にいるような安らぎを感じました。
孫たちと過ごす懐かしい日々でしたが、自然に触れて季節を楽しむときは、かけがえのない時間でした。

見上ぐれば坂の上には薔薇の家

玄葵水遣る人に今朝も会ふ

十葉を辿りて聞いて水の音

子の手より天道虫の飛び立てり

白南風や影踏みの子の行き過ぎて

柿の花小径にいつか迷ひをり

嬰の顔眺めて通る夏の昼

みどりごの声する方に緑雨降る

老鶯の遠く聞こゆる雨上り

雲ひとつ泰山木の花の上

《作品鑑賞》

秋沙

「坂の町」は、娘さんのお産を手伝って横浜で過ごされた時のことを詠まれた作品である。自然に触れて、お孫さんと過ごされた日々を十句に詠まれている。

子の手より天道虫の飛び立てり

天道虫をお子さんの手に乗せていると、急に飛び立ってしまった。驚いているお子さんと、見守る作者の姿が見えて来る。

柿の花小径にいつか迷ひをり

毎日、散歩している径に柿の花が咲き始めたので立ち止まって眺めていると、径に迷ってしまったのである。

雲ひとつ泰山木の花の上

雲の一つしかない空に向かって真白い泰山木の花が咲いている。作者は泰山木の花の下に佇んでしばし眺めている。

幼少期の冬

雲雀

私の幼少期と言えば、七十年以上前になります。
その頃は、終戦はしたものの、被爆した広島はみ
んな、日々の生活に懸命でした。職業軍人だった父は、
新しい職に就き、平和な毎日の暮らしを家族と共に味
わっていたでしょうか。

今の私の暮らしと比べて、大きな変化を思うとともに、
当時の暮らしに味わいを感じたりもします。

炬燵にふも父は紙縫り縫る

針仕事まだ続けたる除夜の母

隙間風あるも構はず福笑

勝ちたさに歌謡んずる歌留多取り

兄の独楽気性のごとく唸るなり

黒豆の鍋煉炭にずつと乗る

風揚のただ赤顔で走りをり

冬の夜、ゴム飛びのゴム繫ぎをり

冬帽の編み上がるのを待つてをり

スカートをとたくり、ゴム跳び春の土

《作品鑑賞》

前文を読む限り、作者は私と年齢が近く、幼少の頃の遊び
も殆ど変わらない。一句一句にわくわくさせられ、七十年前
に引き寄せられた。

炬燵にふも父は紙縫り縫る

紐のない時代、父の紙縫りは大切な仕事。それを子供なりに
興味深く見ている。

勝ちたさに歌謡んずる歌留多取り

兄弟姉妹が何人かいるのが分かり、賑やかな生活ぶりが伺え
る。負けず嫌いな作者はひとりこっそり歌留多を覚えたに違
いない。

スカートをとたくり、ゴム跳び春の土

女の子はみんなゴム跳びに夢中。その様子を「スカートをとた
くり」と表現し、勢いよく跳ぶ姿を表しているのが見事だ。
「春の土」で温かく結び、生き生きとしている。

蝶の飛ぶ橋を向うに渡りけり

ここからは吉備は山がち雉鳴いて

青景風いま一度来る大古墳

古墳より鮎川沿ひに帰りけり

大川を越ゆる大路や蘆青く

鬼ノ城を源として螢飛ぶ

袋掛飛鳥は遙か遠くにて

上道下道みな梅雨に入る

梅の実にとつり安芸の暮れにけり

隧道を抜けて帰りし浴衣の子

微睡のなか五月雨を聞いてをり

五月雨に尾道水道霞みたり

木下闇細き小道の下りたる

近道に零れてゐたる柿青し

短夜や米寿を祝ひ集ひたる

二階まで上がってきたる守宮かな

夏霧の丹波篠山夜の明くる

書込みの多きノートに汗の染み

風鈴を窓辺に提げる腕かな

夜店の子青酸漿を髪に差し

隧道を抜けたる光のかざろひぬ

朝の日のこれから上る玄葵

夏の蝶ひらり隣の庭へ飛ぶ

朝の日の差して柘榴の花あまた

あめんぼう遠くに鯉の跳ぬる音

拾うては厨に実梅並べたる

梔子の香れる雨の町をゆく

梔子の花に夕べの雨の降る

山の宿夏鶯に目覚めけり

林道に夏鶯のよく鳴いて

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

子の摘みし水引草を壺に挿す

梅雨雲の赤く棚引く夕べかな

月下美人園唾を吞むて咲くを待つ

雑魚寝して四方山話明け易し

裏山の畑の端に令歎の花

人影に寄り来る金魚尾鰭振り

人影に口をパクパクせる金魚

消灯に金魚の眠る水の底

筋雲の中より秋日昇りけり

秋の日の雲を仰け反り見てをりぬ

秋沙

黄の濃きカステラ初夏の昼下り

梅雨鵲しきりに鳴ける山の上

遠ざかりまた近づいて梅雨鵲

梅雨晴間雲の流れの早さかな

材料の多き副業夏至の雨

リハビリへ母連れて行く戻り梅雨

鍋底のカレー取りきる盛夏かな

山積みの工事のがれき南風吹く

リヤカーを引いて下り来る夏の山

万緑の中や古びし橋に立ち

亜矢

つばくらの岩をかすめて翔る

ほうたるに知らぬ子集ふ夏の里

ほうたるの組みつほぐれつ落ちにけり

楊梅をまた落としたる鵲かな

梅雨明の三和土にデッキシューズ出す

衰へど義父みな食ぶる西瓜かな

鰻焼く煙の中の人の列

グラウンド道具手入れす夏夕べ

夏の夜や湯治の肩の並びたる

朝顔に白壁のなほ眩しくて

綾乃

薰風や鶯はしきりに湖に出て

薔薇垣へ俄かに風の吹きにけり

空の色しばし見てをり五月尽

晴天に大きく揺れて玄葵

目の前のベゴニアひとつ落ちにけり

子燕のひときは鳴ける薄暮かな

梅の実が揺るる景陰に見えてをり

紫陽花や友の便りの無きままに

暮れてゆく空が向うに山法師

休みなく滝川に飛ぶ夏の蝶

井藤希

虹色の日傘で巡る遊園地

不揃ひのトマトの積まれ無人市

登山口揃ひのリボン胸につけ

向日葵の目隠しとなる離れかな

夏の夕こぼしは触るる雨戸かな

夏の川濁りて憩ふ人もなく

微睡みの深き眠りに青田風

水遊び祖母も濡れたるカーポート

郊外の友を見舞ひて月見草

終点の迫りしバスに夕立来る

栄吉

溪谷を行けば竹の葉散りにけり

椎の木は岩国城の山に咲く

百日紅青き空へと房を伸ばす

歩き終へ夕暮に食ふ氷菓かな

梅雨明や蘇鉄あをを伸ばしてをり

行く道に枝を伸ばして合歡の花

海に沿ふ道に浜木綿咲きにけり

万次郎像に立ち寄り土佐の夏

万緑や峠へとゆく細き道

夏草の中を参りて父の墓

大畑恵

空つばの鳥の巣揺らし南風吹く

明易し注射の痕のまだ疼き

自転車を押して入りけり夏木立

斑猫が止まれば止まる礎の道

日盛の石段上る蟻の列

月涼し水平線に近く見え

炎天の駅のホームに潮匂ふ

発車には少し間のありラムネ飲む

雷雨来てたちまち島の隠れたる

寺町の夕暮にまた白雨かな

病窓に電車の行き来夏浅し

桜の実病院前のバス停に

病状を詳しく話し白日傘

うねうねと通学の道夏の川

夏の月ほのかに山の端の赤く

夏の夕むらなく深き空となり

朝曇竿提げて行く船着場

夏の朝太陽すぐに小さくなり

片かげり終点で降り明知線

青芭蕉たびたび揺らし列車過ぐ

夕風の螢袋を摘みにけり

螢狩り前掛け外し母と行く

梅雨晴の朝日と風を部屋に入れ

自転車に子を乗せ過る青田かな

足の辺団扇で扇ぎ立ち話

朝まだき遠雷のして目覚めけり

学校の帰路の生徒に日雷

夕立の髪を拭へる女学生

風鈴を吊るして窓を少し開け

風鈴の音の合間の寝息かな

暁子

新庄憲彦

すみれ

立ち寄りし友と麦茶を飲みにつけり

水音の次第に強く夏の蝶

いつまでも蟻を見てゐる男の子

蟬時雨とほり川面に近付きぬ

目の前に系蜻蛉来る朝かな

涼しさや岩を越えたる水之音

朝涼の海へと向かふ鳥一羽

谷川に日の斑流るる夏の昼

白雨去る一景一景に霏して

白蓮の花弁音無く散りにけり

知佳子

裏山の夏鶯を母と聞く

電線と屋根を行き来の燕の子

子の蒔きし向日葵のけふ咲きにけり

故郷の緑蔭に犬埋めけり

鮎を釣る人を見てゐる橋の上

歳重にも山に咲きたる令歡の花

畑の紫蘇今日ことごとく刈り取られ

診療所婦人持ち来るグラジオラス

誰も居ぬ公園歩く夏の朝

玄関の一輪挿しに桔梗かな

ちどり

庭に來し蝶を眺めてお茶を飲む

分け入りて矢車草を摘みにけり

はうたるに戦死の祖父を想ひたる

鶯草の塀に隠れて咲いてをり

鶯草を道にしやがんで眺めたる

嫁入りの時の日傘を差してみる

山法師咲く道をまた帰りけり

届けたき人を思ひてトマト摘ぐ

今摘ぎしトマトの色を見てをりぬ

両手上げ樂し樂しと阿波踊

雲雀

落雷や瞬きするハムスター

夕立を仰ぐ水玉模様の子

夕立の駅あの学生の母らし

消えた虹プラットホームの大人達

一様に団扇ひらひらスタジアム

応援の横を進んで行くビール

遅刻した女の氷水赤し

晩涼やちよつといい珈琲と星

夏の雨眼下に地上の傘動く

山盛りのトマト丸く皆転がる

ふじ女

明易し小鳥の声に目覚めけり

竹皮を脱いで雀のよく動く

濃あぢさる身重の人に手渡しぬ

昼の灯をともして梅雨の厨かな

梅雨の月三行日記書いてをり

梅雨晴間雀わんさと庭に鳴き

梅雨晴間厨の床を拭きあぐる

鉄塔の真ん中に来る夏の雲

片蔭に見え隠れして吾子の影

青芝の湿りて野外コンサート

松田裕子

水口に群るる小魚田水張り

夕星や水田の風に端居して

葭切の鳴いて月夜のしづかなる

再開をせる診療所南風吹く

県ざかひ青菜の道をひた走り

月見草潮騒とどく土手に咲く

大夕焼母の呼ぶ声聞こえけり

夕暮や玻璃の守宮の動かざる

峰入の六根清浄声合はせ

風鈴の音に目覚むる旅の宿

森口良樹

令歎咲くや川の流れの音のなく

歩くこと日課としたり花石榴

水盞月や夫の麝のリズムよく

大樟に初蟬の声してゐたり

郭公や頂上晴れて伯耆富士

アイスティ蒜山三座見渡して

残像となりて蜥蜴の去りにけり

鳶鳴いて工事現場の三尺寝

夕風や烏賊釣舟の慌ただし

辻純江

田植終へ井手に泥靴洗ひをり

実梅かな塩に漬ければ香りたる

傘差して雨の音聞く入梅かな

話し込む農婦の腰の蚊遣かな

病景を踏んで遺構の町に入る

北国の日の出は三時昆布干す

携帯の扇風機持ち下校の子

紫蘇を揉む川辺に子らの声のして

白南風に浜の社の幣揺れて

山野ウタ

街へ行くおろした傘を差したくて

自転車の練習の子や梅雨夕焼

雨降つて蚊遣火の香の濃くなりぬ

井戸端の茹子に差したる朝日かな

匙の鈴ちりんと鳴らす氷菓かな

腰下ろす庭師の皺に汗の玉

片蔭に入りて待ちたる信号機

バレリーナ真似る少女のサンドレス

村上理江

ビル街の外れよりさす日傘かな

夾竹桃川面に赤く枝垂れたる

故郷を取り囲みたる雲の峰

櫓よりひとり眺むる雲の峰

寝蓐葎から小さき腕のはみ出して

ワイキキを日傘で歩く母子かな

撫子

花菜畑分けて線路の真直ぐなり

田を植えて校歌聞こゆる学舎かな

十本の苗を植ゑたる茄子の花

あぢさゐの雨の雫の一つ落つ

山を下り貴船に食ぶる冷さうめん

英一

令歆大樹遠目に紅のあちこちに

令歆の花ふはりと肩に止まりけり

蟬しきり夜明けの山の二階より

片蔭を選んで歩く山の道

飯笊を吊るした部屋の釘の跡

紀英子

一筋にのぼり来たりて蟻群るる

蟬の殻みやげと云はれ手に受くる

少し老ゆ吾が首筋に蟻の這ふ

丸々と大きな桃や祭の夜

鶏頭の種のこぼれし場所に咲く

桑門わかこ

小さき花ジェルに固めて夏料理

パレットの絵具の乾く夏休み

一滴の酒も残さじ大西日

空缶に巴の形に守宮果つ

夏の旅潮引くやうに解散す

高梨英子

リモートで教はりながら梅仕事

埃取りまたすぐ回す扇風機

自転車に付けし日傘の色の褪せ

地下街を並んで歩く日焼の子

山崎桂子

学童を送りて見上ぐ夏の雲

廢校の窓から見上げ夏の雲

突然の雨に日傘をさしにけり

遠藤さつき

雨上りどこからとなく蟬の声

絵手紙にひまはりを描き夏見舞

雨止んでつゆ草の青光りをり

金川昭子

雲の峰へダル漕ぐ足忙しくなく

ソーダ水グラスの滴目で遊ぶて

羽抜鳥好きな粟穂を食べてをり

上島康子

一番に小窓開ければ蟬しぐれ

汗拭ひ坂道上る少女かな

突然の雷雨に足の止まりたる

河原静子

雲の峰団地を回る選挙カー

日傘さす男性も居て大手町

玉子かけご飯かき込む日焼の子

熊谷ゆり子

雲の峰新幹線の窓に見て

白日傘行き交ひ渋谷交差点

銀座へと樂譜求めて日傘さす

高嶋彌代

夕立の来る気配する雲の色

雨傘を日傘としたり通り雨

もてなしは涼しき風よ夏座敷

友岡葉山子

夏の朝太極拳に老つどふ

お出かけは白のスーツと夏帽子

ちらほらと男の日傘見かけたる

みさ子

街道を日傘傾け行き交ひぬ

汗ばめる寢床に聞いて雨の音

校舎から歌声聞こえ日の盛

やす保

令和四年六月度作品集より

ふじ女 私の選んだ十句

神の前通りて春の海に出づ	佐保光俊
アカシアの香る通りに差し掛かる	村上正人
明け方の雨に濡れたる花あやめ	高尾ひとみ
青梅をよけて自転車蛇行せり	綾乃
薫風や隣の犬の寄り来る	栄吉
赤白黄小庭の薔薇へ雨の降る	大畑恵
紫陽花の蔭より来たる男の子	すみれ
アマリリス北と南に向いて咲き	雲雀
砂浜を歩いて行けり夏帽子	森口良樹
お隣の紫蘇よく育つプランター	桑門わかこ

松田裕子 私の選んだ十句

真つ直ぐに上古の道や紫蘭咲き	佐保光俊
堰落つる水を離れず揚羽蝶	秋沙
老犬を先に入れたる砂日傘	栄吉
咲き満ちて桜に古き駅のあり	新庄憲彦
しもつけを母と育てし日のありて	すみれ
空白む今鳴いたのはほととぎす	友岡案山子
今年またそろそろ始む梅仕事	雲雀
老鶯や写経の筆を置いてより	高嶋絹代
卯の花のこぼるるままに留守の庭	撫子
日暮まで間のある山の時鳥	上島康子